

インタビュー

ホームステイボランティア

はだ かずえ
羽田 和恵さん（幸区在住）

羽田和恵さんは、幸区古市場にお住まいで、ご主人と電器店を経営されています。家族は他に3人の息子さんと愛猫。ホームステイボランティアを始めて5～6年になるそうです。毎年1～2回引き受けて下さっています。今まで、アメリカ、オーストラリア、台湾、ベトナムなどからの学生や新聞記者を多数受け入れて下さっています。

Q1 ボランティアを始めた動機は何ですか？

息子達がニュージーランドとアメリカでホームステイの体験をしました。その時に、とても良くしてもらい、「ぼくの家もやりたい。」と言われたのがきっかけです。

Q2 ボランティアをするときに心がけていることは？

最初は息子から言い出されたことなので、違和感が多少ありました。だんだんやっていくうちに、日本人の感覚にとらわれてはいけないと思うようになりました。ですから、色眼鏡でその人を見るのではなく、素直にそのままを受け入れるようにしています。

日本の普通の生活を知ってもらいたいので、食事は日本の食事を出すようにしています。五目寿司を作ったり、夏はそうめん、冬はおでんというように。手巻寿司は皆さん喜んでくれます。ちょっと遊びを取り入れて、朝食に納豆を出すこともあります。

意外と難しいのですが、気をつかわないようにしています。冷蔵庫は自由に開けてもらっていますし、食事の手伝いもしてもらっています。

Q3 ボランティア活動はあなたにとって、どういうものですか？

わが家は電器店を営んでいます。ご近所の人々に支えられています。その人達に直接お返しはできませんが、自分のできる範囲内で、どこかでお返ししたいという意識があります。人間は一人で生きているのではなく、お互いに支え合って生きています。わが家の子ども達も社会に出て、だれかのお世話になるかもしれません。そういうときに自分のやったことがうまく息子達に還ってく

るといいなと思っています。他の人に意地悪していて、それが自分の子どもに還ってきたら困りますものね。

外国の方が家の中にいると、家の中の空気が変わります。何かと英語が聞こえてきたり話したりと、旅先にいるようで、ここって古市場かと、ふと思うことがあります。生きた英語を使うチャンスにもなっています。

外国の方に日本の良さを教えられることがあります。平和、都市と郊外の住宅の落差が少ないことなどです。当たり前と思っていたことが、実はこれってすごいことなのだと思えて考えさせられます。



2003年3月 エチオピアの学生と羽田さん一家 山中湖にて

Q4 心に残るエピソードを教えてください。

アメリカの高校生の男子が来た時、家の前を通る市営バスに乗りたいたうので、一緒に川崎大師に行きました。帰りに、バスを降りる時にバスのプザーを押してみたいと言いました。息子達が、「5・4・3・2・1 プッシュ。」と声をかけ、実際に押したら、「ピンポン」と鳴り、その子がとても喜びました。すると同時に、後部座席にいた女子高生達からも拍手がおきました。息子達のやりとりを聞いていたのですね。バスの中全体が暖かい空気に包まれ、今でも忘れられません。

Q5 長く続けるコツは？ 今後の抱負は？

「この日は大丈夫、その日は予定があるからダメ。」というように、息子達が友達を家につれてくるような感覚で受け入れています。言葉が十分に通じないのは当然です。だから目と目が合った時には、視線をはずさず、微笑むようにしています。そうするとホームステイに来ている子も落ち着くようです。わが家は「来たい人はいつでもどうぞ。」という感じで人を迎えています。これからも、笑顔を大切に、気持ちで受け入れたいと思